

ミナミキイロアザミウマと海外

野菜茶業研究所 専門員

河合 章 (かわい あきら)

ミナミキイロアザミウマは東南アジア～南アジア原産の種であるが、害虫化が確認されたのは1978年の宮崎県が世界初である。その後、国内での発生地域が拡大するとともに、東南アジア、太平洋地域、カリブ海地域、フロリダ、オランダ等、海外でも発生地域が拡大した。日本が初発地であり、生態・防除研究も日本が進んでおり、侵入国の政府に招聘されて防除指導に行く機会が2回あった。

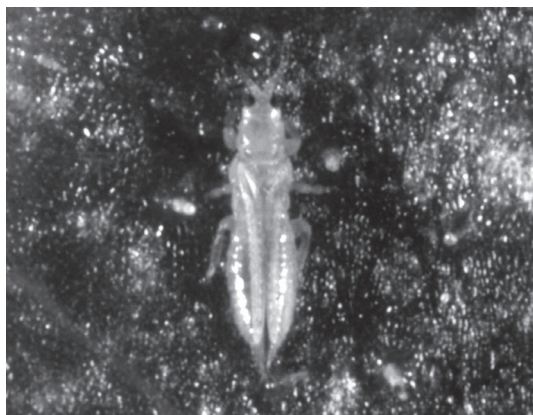
はじめは、1988年に南太平洋のオーストラリアの東「天国にいちばん近い島」で有名なフランス領ニューカレドニアに、フランス海外科学技術研究庁（ORSTOM、現IRD）ヌーメア研究所に2週間招聘された。私にとっては学会参加以外では初めての外国であり、日本とは全く異なる野菜生産現場、害虫の発生、研究機関のありかたを見てとても感動した。なお、研究所は観光地でもある首都ヌーメアの街中にあり、観光も十分に楽しめた。

招聘してくれた研究者から事前に「せっかくの機会なので、前後に周辺国の研究機関を訪問してはどうか。途中の週末は周辺国の観光地に行ってみてはどうか。希望を言えばアレンジする」旨の問い合わせがあった。当時は公務員であり、海外出張には公用旅券（目的国でのみ有効で、他の国では無効）で行くことになっており、残念ながら丁重にお断りしたが、理解できないようであった。現在は、目的が明確であれば周辺国の研究機関を訪問することもできるようになっている（周辺国の観光地に行くことは、現在でももちろんできないが）。喜ばしいことであり、研究の進展にもつながるものと思う。

1997年には、在日キューバ大使館からの直接の依頼でキューバを2週間訪問した。渡航当日に大使館で大使から「キューバ政府はミナミキイロアザミウマの分布拡大を自然現象とは考えていない。生物兵器としてアメリカが放飼したものと考えており、その討議にも参加してほしい」と言われ、驚愕した。発生経緯については軽々に発言できない旨、主張したこともあり、生物兵器に関する討議への出席依頼はなかったが、私の訪問後に、キューバ政府はアメリカによる生物兵器の使用として国連に提訴した（詳細は、植防コメント154、2-3参照）。当時のキューバはアメリカの経済制裁で苦しんでおり、

1991年のソビエト連邦崩壊以後、その援助もなくなり、経済的に最も苦しい時期であり、カリフォルニアへ大量の難民が小舟で移動していた。国内を回り、各地で講演会、研究者・農業技術者との懇談を行い、パレイショ・キュウリ等の栽培圃場を見て、キューバの農業事情、農業システムについて説明をうけた。昆虫研究者が思わぬことで国際紛争に巻き込まれることになり、常に心の重たい2週間ではあったが、社会主義下での農業生産、農業研究現場を訪ね、我が国との違いに驚いた。今年の7月、キューバとアメリカは54年ぶりに国交を回復した。極めて好ましいことである。

これ以外にも、ミカンキイロアザミウマ、コナガ、オオタバコガ、ハダニ類等の野菜害虫の関連で、何か国かの農業現場・農業研究機関を訪ねる機会があった。依頼元も、JICA、JIRCAS、植物防疫課等、様々であった。海外での学会に出席し発表する機会は、かつては少なかったが、1990年代から増加し、近年は、公立機関の研究者を含め、大きく増加している。海外の研究者との交流は大変有意義なことである。一方で、海外の農業現場、農業研究現場を訪ねる機会は必ずしも増加していない。こちらも、研究の新たな発展にとって極めて有益なことであり、このような機会が増加することを強く望むものである。



ミナミキイロアザミウマの雌成虫